

V 臨時的調査研究（I）シイタケオオヒロズコガ類の生息実態とシイタケ子実体の被害防除に関する調査

（実施期間：令和元年度 予算区分：県単 担当：西信介）

1 目的

原木シイタケ生産ではシイタケオオヒロズコガ（以降「ヒロズコガ」）類幼虫による子実体への侵入が問題となっている。ヒロズコガ類が侵入した可能性の高い子実体については菌興椎茸協同組合では経験則に基づく密閉による虫出し手法を開発して対応してきたが、虫が出てくる根拠は不明である。

また1種とされていたヒロズコガは平成23年に複数の種が混在していることが明らかになって鳥取県内では4種以上が生息、加害している可能性があり、種によりその生態、加害形態、防除方法が異なる可能性が出てきた。

そこで、経験的に行われている虫出し手法についてその実態を調査するとともに、県内に生息するヒロズコガ類の種同定を試みた。

2 実施概要

菌興椎茸協同組合の虫出し方法は、密閉することでシイタケ子実体の呼吸によりCO₂濃度が上昇することで虫が出てくると考えられており、実施現場でCO₂濃度を測定するとともにシイタケ子実体1個のCO₂排出状況を調査した。

ヒロズコガ類成虫について夏と秋の発生期に捕獲を試みた。夏は6月中旬から7月下旬までシイタケほだ場で捕虫網による捕獲を、秋は9月上旬から11月中旬まで粘着シートによる捕獲を行った。捕獲したヒロズコガ類成虫は、触角から雌雄を判別した後、オスについては交尾器の形態から種の同定を試みた。メスの同定は、より専門的な技術が必要であることから今回は行わなかった。

3 結果

菌興椎茸協同組合での3月26日から27日の虫出し作業についてCO₂濃度を測定した。26日午後6時から虫出しを始めたが、20分後には1%を超え、翌朝午前7時20分には2.9%であった。なおシイタケ子実体1個あたりのCO₂排出量を測定したところ、12時間後で52.2~199.2mg/個で、傘直径が大きいほどCO₂排出量は多かった。

ヒロズコガ類成虫について、夏は鳥取市と八頭町のシイタケほだ場12カ所で成虫の捕獲を試みたが、捕獲できなかった。夏の発生ピークは6月から7月とされているが、生産者等の聞き取りから、令和元年夏の発生ピークは調査以前だった可能性が高く、捕獲時期が遅かったため捕獲できなかったと推察された。

秋の捕獲は、鳥取市河原町と国府町のほだ場4カ所で粘着シートにより行ったところ、9月6日から10月18日にかけて国府町のほだ場1カ所でオス49頭、メス10頭のヒロズコガ類が捕獲された。オスの交尾器から48頭がシイタケオオヒロズコガ（*Morphogoides moriutii*）で、1頭がニシシイタケオオヒロズコガ（*M. occidentalis*）と同定され、同所で2種のヒロズコガ類が確認された。



写真 粘着シートによる成虫の捕獲(赤丸)